

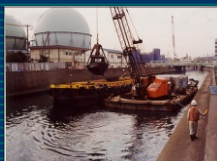
## 海域における環境改善対策

1. 海域の汚濁負荷の削減
2. 海域の浄化能力の向上
3. 東京湾の現況を踏まえた今後の海域対策について
4. まとめ（海域対策）

### 1. 海域の汚濁負荷の削減



- 汚泥の浚渫（東京港、横浜港）  
汚泥浚渫量 192,300m<sup>3</sup>
- 汚泥上への覆砂（東京湾奥部、横浜港）  
覆砂量 421,900m<sup>3</sup>
- 海面を漂う浮遊ゴミ・油の回収（各港、一般海域）  
（千葉港、東京港、横浜港、横須賀港）  
浮遊ゴミ回収量 51,000m<sup>3</sup>  
油回収量 3,023m<sup>3</sup>
- NPOや漁業者等による海底ゴミの回収や海浜清掃  
ゴミ回収量 約33.9t



汚泥浚渫（東京港）



浮遊ゴミの回収（べいくりん）



ボランティアダイバーによるゴミ回収（横浜港）

## 2. 海域の浄化能力の向上



- 干潟・浅場・海浜・磯場を再生・創出（東京港、川崎港）  
浅場・海浜造成量 5.5ha
- 生物に配慮した港湾施設を整備  
（千葉港、東京港、横浜港、横須賀港）
- 深堀跡の埋戻しを実施（東京湾奥部）  
埋戻し実施量 960万m<sup>3</sup>



浅場の創出（東京港）



生物付着基盤



生物付着基盤となる施設（千葉港）

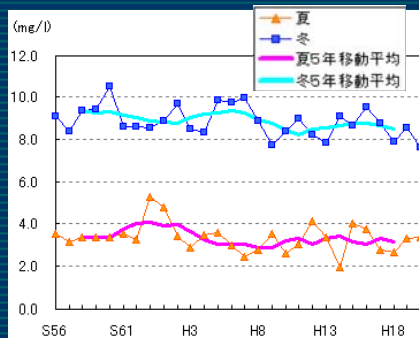


カ二護岸の整備（東京港）

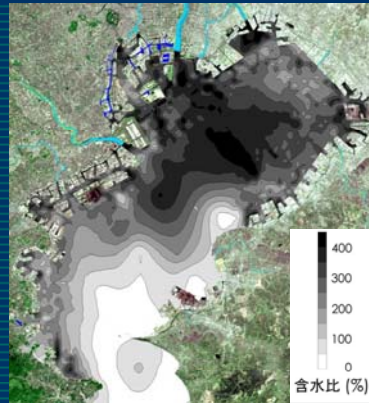
## 3. 東京湾の現況を踏まえた 今後の海域対策について



### 東京湾の環境に対する現状認識



底層DOの経年変化



底質調査結果

- ① 東京湾全体では、底層DOの顕著な改善傾向は見られず、厳しい生物生息環境。
- ② 湾奥部で広域的に有機汚泥が堆積。夏場に底層水塊が貧酸素化する。
- ③ 沿岸域では浅場・干潟の良好な底質環境が分布。底層水塊の貧酸素化が弱くなっている。

### 3. 東京湾の現況を踏まえた 今後の海域対策について



#### 海域対策の取組み状況

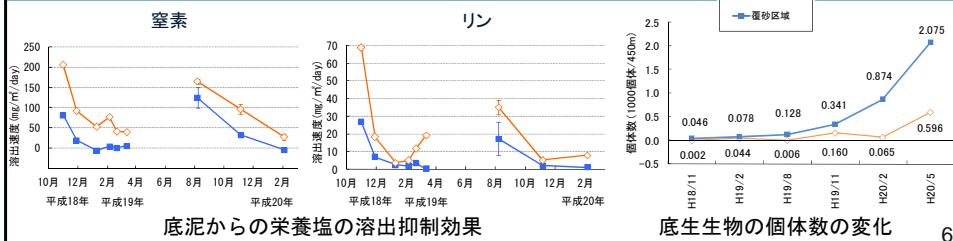
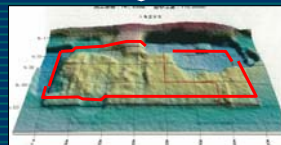
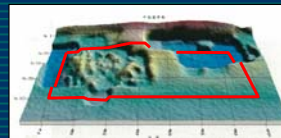


### 3. 東京湾の現況を踏まえた 今後の海域対策について



#### 【海域対策による効果】

#### 東京湾奥部（浦安沖）における覆砂



### 3. 東京湾の現況を踏まえた 今後の海域対策について



#### 【海域対策による効果】 生物共生型護岸の整備（横浜港）



### 3. 東京湾の現況を踏まえた 今後の海域対策について



#### 今後の海域対策を検討・実施するうえで重要となる視点

##### (1) 沿岸域における生物生息域の保全・創出

- ・既存干潟等の自然環境の保全に配慮しつつ、沿岸域において浚渫土砂を活用した干潟・浅場・海浜の創出により貧酸素化を抑制
- ・港湾構造物の生物共生化等により生物が生息可能な場を創出
- ・上記の取組みを有機的に連携し、東京湾における総合的な沿岸域管理を推進



海浜の創出（川崎港）



環境に配慮した護岸整備（横浜港）

### 3. 東京湾の現況を踏まえた 今後の海域対策について



#### (2) 環境データの利活用

- ・環境データの継続的な観測と蓄積
- ・自動連続観測装置(モニタリングポスト)等から得られる環境データの利活用による海域対策の効果を精度よく再現できるシミュレーションの開発
- ・シミュレーションを活用した今後の目標設定、効果的な海域対策の企画・立案

モニタリング  
ポスト



#### (3) 多様な主体との連携・協働

- ・研究機関、民間企業、市民、NPO、漁業者など多様な主体が連携・協働して、具体的な行動を実践
- ・NPOによる自然体験活動や環境教育等の取組の推進
- ・干潟・浅場等の順応的管理における市民等との協働のためのルール作りや利用を促進する仕組みづくりの推進



環境教育・自然体験  
活動の実施(横浜港)

9

### まとめ（海域対策）



- 行動計画に位置付けられている汚泥浚渫、覆砂、清掃船等による浮遊ゴミ回収、清掃活動、浅場・海浜の造成、生物に配慮した港湾構造物の整備、深堀跡の埋め戻し等を着実に実施している。
- 東京湾における調査・観測結果と、これまでの海域対策の効果を踏まえ、今後の海域対策を検討・実施するうえで重要となる視点について整理した。
- この視点に基づくとともに、地球温暖化対策の観点から海洋による炭素固定(ブルーカーボン)に着目しつつ、引き続き各種海域対策を推進していく。

10